

「三か月半を振り返って」多忙リア充(?)」

24生 上野 裕介

広島大学に入学して早三か月半が経ちました。そして、期末試験が間近に迫り、間もなく一セメも終わろうとしています。そこで私は、長いようであつという間だった、この三か月半を振り返ってみたいと思います。

私は、大学に入ってから、「オレンジ」と呼ばれるようになりました。というのも、「フアラオさん」こと飯尾先輩が、総科の入学前交流会初日の自己紹介を始める時、オレンジ色のフリースを来ていた私に向かって、「じゃあ、そのオレンジから。」と言ったからで、それが私の大学生活の始まりでした。私は、「オレンジ」になって以来、キャラ作りを無駄に頑張ったので、割と早い段階でいろんな人に名前を憶えてもらえたのではないかと思っています。また、今は完全に「オレンジ」として定着していて、それが当たり前になっていますが、もし、先輩のあの一言が無かったら、果たして今どうなっていたのか……。

次に、サブタイトルにも書きましたが、『多忙リア充(?)』ということについて考えてみたいと思います。まず、『リア充』という言葉は、最近では、彼氏・彼女がいる人のことを指すことが多いと思いますが、ここで扱う『リア充』は、彼氏・彼女の有無に関係なく、ただ単純に『リアルが充実している』という意味でいきたいと思っています。

まず、私は、飛翔編集委員以外に、生協組織部OZという、部活でもサークルでもない、生協と組合員である学生を結ぶ架け橋のような存在である、少し特殊な集団に属していたり、ESSのドラマセクションという、英語で劇をするサークルに属してたりします。そのため、非常に忙しく六月は一日もスケジュールに空きがなく、さらに悪いことに体調を崩してしまい、二〜三週間の間、腹痛や熱・咳といった症状に苦しめられました。

では、果たしてそれは、リア充と呼べるのでしょうか？

もちろん、自分の好きなことをやっているのです、三つのうちどれか一つだけとかなら、おそらく楽しくできて『リア充』かもしれませぬ。しかし、今の自分を振り返ってみると、明らかに「忙しさ」が「楽しさ」を上回ってしまい、ただ単に忙しさに追われていただけで、全然楽しめていなかった気がします。

結論…楽しいことでも、それが、ある程度の強制力で「しなければならぬこと」になっていて、さらにそれが複数重なる、スケジュールは充実している、『リア充』からは遠ざかってしまう。

結論としてはそうなりましたが、私は、今のところどれもやめるつもりはないので、適度に休息を取りつつ、全てを楽しみながら頑張っていくかなと思います。

「ソーシャルネットワーク」

24生 藤本 迪子

私は現代の英知を毎日駆使している。Facebook、mixi、twitter、Line、skype……。そう、ソーシャルネットワークである。

こんなにやっていて大変じゃないかって？ すごく大変である。特に丸一日チェックできない日があり、次の日の朝見ると異常なほど更新されていたときの、テンションのさがりようったら半端じゃない。そう、それがソーシャルネットワークである。

私がこんなにもソーシャルネットワークを利用しているのは、それぞれのツールにしかないメリットや個性が面白いからである。

よく、ネット社会を非難する風潮があるが、私はネット社会も悪くないと思う。手紙が廃れ、直接顔を合わせて会話することが少なくなっても、私はネットでしかできないことをたくさん得ている。

昔の日本は良かったという声も聞くが、失われてしまったものよりも新しく得たものの方が私にとってはよほど重要だ。

私に新しい刺激を与えてくれ、人とのつながりの架け橋となってくれ。そう、それがソーシャルネットワークである。

「私の新聞事情」

24生 原田 みずほ

ある日新聞を読んでいたら、「新聞が似合う」というようなことを言われたことがあります。私は、実家が山陽新聞を取り始める前は朝日新聞だったので、朝日新聞派です。図書館でも学生プラザでも、朝日新聞はたいてい読まれていないので、すぐに読むことができずラッキーだと思っただけです。

ただ、一つ残念なことがあります。それは、広島には山陽新聞がない

ことです。山陽新聞には、『正妻』という連載物があつたのですが、私はそれを楽しみにしていました。もちろん朝日新聞にも連載物はありませんが、なんとなく読む気になりません。話の始まりがわからないからなのでしょう？自分でもわかりません。新しい連載物が始まったら、読んでみようと思う今日この頃です。

「西条の祇園祭」

23生 加藤 正暉

この原稿を書いているとき(七月十四日)に僕は部活の一環で祇園祭りに神輿の担ぎ手として参加しました。このお祭りは神輿を担いで西条の酒蔵などをめぐりそれぞれの繁栄を祈願するというものです。僕は二回目の参加でしたが、めぐっていく先々でおにぎりやお菓子、飲み物をたくさん頂きました。なぜ僕たちがこのお祭りに参加しているのか、それは主催者の方々が部活の後援会をしておられ、普段から多くの援助と声援をいただいているからです。このように大学内の部活動と地域の密接なコミュニケーションが広島大学と西条を結ぶパイプの一つになれば、ただ大学生活を四年間過ごすよりも濃い経験が得られると感じました。

お祭りの後に宴会が催され、普段食べられないようなご馳走と西条の美味しいお酒を楽しみながら、このお祭りに参加した様々な人とお話して、一ついいなと思った話があります。「このお祭りに参加して、誰かと一つになって物事を成し遂げる。この経験がいつか地元に戻ったとき、先頭に立って頑張れる力になる。」西条に昔から住んでいて、西条を愛している。活力の源は自分の住む「西条」であると言わんばかりでした。僕の出身は神戸ですが、いつか大好きな神戸の先頭に立てるように大学生活をより頑張ろうと思うことができました。また来年も参加できるのが楽しみです。